

震度5弱の地震がありました

令和3年12月3日に、和歌山県で震度5弱の地震がありました。御坊市が5弱だったそうです。そして、この地震の揺れを感じたところ、つまり震度1と表示されたところは非常に広範囲でした。広川町は震度4だったそうです。最近、地震があった時に広川町の震度が出ない、と思っていたところ、「広報ひろがわ12月号」に「経年劣化により破損し、正確な震度が計測できない状況で、地震が発生した際、気象庁が発表する震度に関する情報に広川町の震度情報が反映されていません。」と出ていました。

ところで、12月3日の地震の時、耐久中学校は2学期の期末試験中だったにもかかわらず、テストを中断して広八幡宮へ避難したそうです。この行動は大きく評価したいと思います。あの時、私たちは「稲むらの火の館」ですぐテレビをつけて、情報を集めようと思いました。すぐに、「津波の心配はありません。」と出たと思います。その情報さえ見れば、避難する必要がなかったのかもしれない。しかし、テストを中断してまで避難したのです。生徒達は「海の近くで大きな地震があれば避難」と印象に残ったと思います。将来、こうした体験をした時に、避難したことを思い出してくれたら、それは生きた教育でしょうね。

この日、「館」へは美浜町立松洋中学校が見学に来る予定でした。地震直後に電話があって、「水越トンネルの手前で地震を知ったので、バスを止めて待機していますので、少し遅れます。」ということでした。後に到着して、先生にその時の状況をお尋ねしたら、バスは走っていたので地震は分からなかったが、携帯の緊急地震速報が鳴ったので、ということでした。その上、この学校の皆さんにガイダンスの中で、朝の耐久中学校の情報を話したところ、その先生は、「この耐久のことは、学校へ持ち帰って皆に伝え、情報を共有します。」と言われました。どちらの話も、素晴らしいと思いますので、皆様にお伝えします。

「第17回稲むらの火講座」

を開催します

「第17回稲むらの火講座」を開催いたします。今号の左側に昨年12月の地震のことを書きました。最近、日本のあちこちで震度5や4の地震が起こっています。

今回の「稲むらの火講座」は和歌山地方気象台から地震の専門家の台長さんをお招きします。

講師は、石井嘉司(いしいよしもり)先生で、和歌山地方気象台の台長をされています。石井先生は、和歌山県紀美野町(旧野上町)出身です。大学では、東海地震に関する研究を行い、1984年に気象庁に入られました。若い頃は潮岬測候所や和歌山地方気象台などで、気象観測や天気予報に従事されたそうですから、地元和歌山の気象にたいへん詳しい方です。1999年からは大阪管区気象台地震火山課や気象庁地震火山部で、地震を監視されました。津波警報や緊急地震速報を発表するシステムの開発・運用に関わるなど、主に地震関係の業務に携わり、2020年からは和歌山地方気象台の台長を努められています。



今回の第17回稲むらの火講座講演会は

日程 令和4年3月20日(日)

午後1時30分～3時

場所 稲むらの火の館3階ガイダンスルーム

演題「地震・津波から命を守る」

新型コロナオミクロン株の感染も心配されますので、今回も定員を60名に限定して開催いたします。また、当日までに連絡する可能性もありますので、必ず参加申し込みをお願いします。

電話 0737-64-1760

FAX 0737-64-1761

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第11回 方丈記にまなぶ

鎌倉時代に編まれた鴨長明の随筆、『方丈記』は、防災の教科書ともいえる名著ではないだろうか。わたしが大学で担当している「災害ジャーナリズム論」という講義科目では、毎年この作品にふれるようにしている。

地震や大火などの災害に関する事例が濃密に盛り込まれていることにとどまらず、この作品には、他の古典を圧倒する優れた特徴がある。紙幅の都合で二つだけあげるとすれば、ひとつは被害の状況を克明に極めてリアルにレポートしている点、そしてもうひとつは、防災の理念を単なる“お題目”で終わらせていない点である。

鴨長明の筆致は、まるで古参のジャーナリストでもあったかのように、実態の描写に無駄がなく切れ味が鋭い。「あるものゝふのひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、ついちのおほひの下に小家をつくり、はかなげなるあとなしごとをして遊び侍りしが、俄にくづれうめられて、あとかたなくひらにうちひさがれて、二つの目など一寸ばかりうち出されたるを、父母かゝへて、聲もをしましかなしみあひて侍りしこそあはれにかなしく見はべりしか」。地震で倒壊した土塀に押し潰された幼子の顔を見遣ると、眼球が少し飛び出している…。幼子の亡骸を抱えて、憚ることなく号泣する父母の様子。なんとというむごさ。なんとという無念さ。読者の心を強く揺さぶる。

ここで鴨長明は、評論家に徹するような無粋な構えなど見せず、時代の宿痾に対抗した生活実践を為す。「すべて世の人の、すみかを作るならひ、かならずしも身のためにはせず。或は妻子眷属のために作り、或は親昵朋友のために作る」、そんな華美で空疎な住居や都市空間には背を向けて、方丈の庵に移り住み、簡素な暮らしを選び取る。防災とは、生き様そのものなり。自然（天然）との調和の中に、人生の喜びを見つけるのだ。

「地域防災」誌に和歌山県・広川町の情報が掲載される

一般財団法人日本防火・防災協会が隔月に発行している情報誌「地域防災」2021・12月号に11月5日の「世界津波の日」の話題が掲載されました。広川町の「なかよしこども園」の子ども達の避難訓練の様子の写真が載っています。



また同日開催された和歌山県と広川町が主催した「濱口梧陵偉業顕彰シンポジウム」は、県民文化会館での写真です。このシンポジウムは「稲むらの火の館」でもパブリックビューイングとして、参加することができました。

この「地域防災」誌は、第1号から全部が「稲むらの火の館」図書閲覧所にありますので、興味のある方はお越しください。

「梧陵語り部ジュニア」学習発表会

今年で4回目になりました「梧陵語り部ジュニア」の学習発表会が1月22日(土)午後1時半から広川町民会館で行われました。今年、5年生が6人、6年生が9人という過去最多の参加者でした。夏休みに、日本遺産ガイドの会のメンバーから、詳しいお話を聞きました。また、正月を挟んではこの学習発表会に向けての、発表原稿の作成や、パワーポイントを使っでの発表準備を繰り返し練習していました。

発表会終了後に、「梧陵語り部ジュニア」の認定証の授与式も行われました。

